
小さなサンタクロース

赤穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなサンタクロース

【Nコード】

N6803P

【作者名】

赤穂

【あらすじ】

受験を控えた高校生、しーなと友羽のとあるクリスマスの一幕。

12月24日、街中が人であふれ、きらびやかに彩られるそんな日の夕方。

来訪者を告げるベルが唐突に鳴ったのは受験生で受験生で加えて受験生であるところの俺がそんな世間から目を背け、受験生らしく自室にこもって勉強していた時のことだった。

最初は母親が出るだろうと放っておいたのだが、どうやら彼女は出かけてしまっているようで、ピンポンピンポンという耳障りな音は一向に鳴り止む気配を見せない。

仕方無く勉強の手を止めると、インターフォンに応える。

「はい」

「その声はしーなだね。私私、サンタクロースだよ」

聞き覚えのある声が、聞き覚えのある調子で受話器から聞こえてきた。

ちよつと待ってるとだけ伝ええると、俺は玄関を開けて声の主を迎える。

「やあ、しーな！メリークリスマス！」

真っ赤なコートに真っ白なマフラー、確かに小さなサンタクロースのようないでたちの友羽がそこにはいた。

.....

.....

「メリークリスマス！しーな！」

部屋に上がるといつものようにベッドの上を陣取り、改めて友羽はそう言った。

さほど大きくないアパートの子供部屋に高校生2人が入るスペースなど限られていて、ベッドの上がこの部屋における友羽の指定席となっている。

「はいはい、メリークリスマス。……そっぴゃお前が来るのも久しぶりだな」

俺は机の上の参考書類を閉じ、椅子に腰をかける。

友羽の家はこのアパートの向かいに建つ一軒家で、昔からよくうちに遊びにきていたが、受験生になってからはめっきりその回数も減ったように思う。

「そうかな……そうかもね。しかしクリスマスだったのに勉強かい？真面目だね、しーなは」

机の上を覗き込みながら友羽が言う。友羽は俺と同級生で、同じように受験生。

付け加えると友羽の志望校は俺と同じで、成績にほとんど差は無い。

「お前が不真面目なだけだよ」

俺の言葉に友羽はムツとしたような顔になると、言い返してくる。

「不真面目つてのは心外だな、しーな。私は真面目だよ。君みたいにクリスマスに勉強しないでいい程度にはね」

「念には念をつて言うだろ」

「過ぎたるは及ばざるが如しとも言つよ。賢い人間は適度な休息をとるもんなんだ」

「ほほう、自分が賢いと？」

「しーなに比べればね」

また随分な言われようだ。

言われっぱなしも癪なので俺はひとつ揚げ足をとってやることにする。

「友羽、俺もひとつ教えておいてやる。クリスマスは明日。今日はな、イブって言っただよ」

「しーな、知らないのかい？この国ではイブのことをクリスマスっていうんだよ？」

「それは知らなかったな。俺はワールドワイドな人間なんでね」

「君とはなかなか長い付き合いだけでもそいつは初耳だね。しーな。そして初目だ。こんな閉じきった部屋に引きこもってるワールドワイドな人間つてのを私は初めて見たよ」

悪かったな。引きこもってて。

「そんな君は知らないのかもしれないね。……しーな、窓の外を見るんだ」

そう言っただけで友羽はいきなりベッドから立ち上がったかと思うと、部屋のカーテンを一気に開け放った。

「おお……」

思わず感嘆の声をあげてしまう。すっかりと日が落ちて

この地域はただでさえ地形的に雪が少なく、加えて最近では暖冬だからでこれだけきちんとした雪を見るのは2年、いや3年ぶりだろうか。

そんな俺をニヤニヤと見ながら、友羽が言う。

「どうだい？」

「……ロマンチックだな」

素直に思ったことを口に出す。

「ロマンチック……。分かってるじゃないか、しーな。」

その答えに友羽は満足そうに頷くと、カーテンを閉め、再びベッドの上に座りしやべり始めた。

「クリスマスに雪、しーな、君の言うとおりロマンチックだ。最高のシチュエーションだね。雪っていうものは天皇誕生日よりも、お正月よりも、節分よりも、そしてもちろんなんでもない日よりも、どんな日よりも、ずっとずっとクリスマスに似合うんだよ。そし

て今日、今、この瞬間、この刹那雪がふっている。君の言うところのロマンチックな雪がね。今日がクリスマスで何がいけないっていうんだい？……なにも私は真夏にクリスマスをやれって言うわけじゃないんだ。しーな。私だってそんな馬鹿な話はしないさ。オーストラリアに行けばいいだけの話したものだ。私が言ってるのは、ただ1日、たった1日クリスマスをずらして何の問題があるんだい？っていう話なんだよ」

これだけの言葉を口早に言いきると友羽は一仕事終わったという風にかかる息をついた。

言ってることは無茶苦茶だがこれだけ一気にしゃべられると、何から言っているのか分からなくなってくる。

「まいったかい？」

二の句が継がないでいる俺を見て、友羽がいたずらっぽく笑いながら言った。

「分かったよ。まいったまいった」

俺は両手を上げて降参の意を示す。友羽の負けず嫌いには敵わない。

「分かればいいんだよ。しーな、君は賢い」

そう言いながらピストルの形にした右手で俺を指差す友羽。

しかし、今日の友羽はいやにテンションが高いような気がする。

いや、普段から、昔からテンションの高い奴ではあるが今日はいつもましてハイに見える。

なにか理由があるのかと尋ねると、

「そりゃま今日はクリスマスだからね。ク・リ・ス・マ・スだからね。今日の私は120%だよ」

という答えが満面の笑みとともに返ってきた。
なんというか、実に友羽らしい理由だ。

「じゃあ、120%の友羽さんは、クリスマスだつてのになんの用事があつてうちにきたんだ？」

「しいな、100の100乗歩譲つて君がワールドワイドな人間だったでしょう。としてもだよ、森を見て木を見ずという態度ではだめだと思つわけだよ友羽さんは。ここは、君が今いる場所は日本なんだよ」

友羽が呆れたような顔で答える。

「ここが日本で、今日はクリスマスだ。ならばやることはプレゼントしか無いんだ。100年前からそう決まつてるんだよ」

俺はよく知らないが日本中でクリスマスを祝うようになったのは古くとも戦後のことだろう。

「と、いうわけだからギブミープレゼント、トリックオアトリートなんだよ。プレゼントくれなきゃ悪戯しちゃうからね」

つまりこいつはクリスマスだから、プレゼントが欲しいから勝手に人の家にやってきて、人の勉強を邪魔しているというわけか。
まるで押し入り強盗だ。強盗にしては随分とかわいらしいけれど。

「つまりなんかやれば黙るんだな」

「しーな。プレゼントってのは人を喜ばせるための物だよ。黙らせるためにプレゼントを渡すなんて下衆な考え方を君がするなんて友羽さんはがっかりだ。もう一度言う、友羽さんはがっかりだよ。プレゼントマンシップの欠片も感じないね」

小さな強盗は、銀行に奉仕精神まで求めるらしい。

友羽さん、世の中スマイル無償提供が当たり前と思っではいけないのですよ。

「そういうプレゼントが欲しいなら事前に言えよ。そうしたら準備くらいしたのに」

「そんな催促するみたいなこと私がするはず無いじゃないか」

自己矛盾。その意味を一から教えてやりたい。もっともこの性格は言っでどうにかなるようなものでもないけれど。

プレゼント……ね。

今から何かを買いに出るのもあれだしこの部屋にあるもので友羽が喜びそうなもの。

俺は少し考えて、考えて、考えるのをやめることにした。

机の上のルーズリーフを一枚とると、手で適度な大きさに切り取ってボールペンで丁寧に文字を書く。

「友羽、親愛なる君にクリスマスプレゼントとして『この部屋の物なんでもプレゼント券』をあげよう。この部屋の中でなんか欲しい物言ってみる」

「ふむ、……なんだか手抜き気もするけどまあ許そう。どこもしれないと田舎の地域振興券や肩たたき券なんかよりはよっぽど有

用そうだ」

「肩たたいてやってもいいんだぜ？」

肩をたたくくらいなら、多分大丈夫だろう。

「いや、それは遠慮するよ。 そうだね、しーな、そのぬいぐるみ、もらっていいかな？」

少しの迷いもなく、友羽は部屋の隅に転がる犬のぬいぐるみを指差した。

随分前からこの部屋に鎮座しているもので、もう大分痛んでしまっている。

「だめだつて言われたつてもらうけどね。 なんてったつて『なんでもプレゼント券』だ」

「そんなんで良いのか？ ぬいぐるみなら別に新しいの買っても」

「んー、いや、これがいい。 サンキュー、しーな」

ま、喜んでくれるならそれでよしとしよう。

さっきの友羽の言葉を借りるならば、プレゼントってのは人を喜ばせるためのものなのだから。

「ところで、お前は俺に何かくれないのか？ クリスマスにやることはプレゼントしかないんだろ？」

「分かっているともさ、しーな。 ギブアンドテイクは人付き合いの常識、マナーだからね。 …… ちよいと失礼」

そうやって友羽は俺の方へ近づいてくると……

突然のことに頭の中が真っ白になる。

「友羽、……お前約束はどうした」

俺は落ち着き直すと両肩に手を置いて友羽を引き離す。

「今日は特別な日だからさ。許してよ、しーな。神に免じてさ」

友羽の言葉と、少し怯えたような表情に俺は、何も言えなかった。無言の時間が2人の間を流れる。

「用事も済んだことだし私はそろそろ帰るよ。しーな。私も勉強しないといけないからね」

気まずい沈黙を遮るように友羽がそう切りだした。

[illegible]

「受験前に一回来ておきたかったんだ、しーなの家。勉強の邪魔になるとは思ってたんだけどね」

玄関先、見送りの俺に背を向けて友羽が呟いた。

「らしくもない」

そうだね。と友羽が自嘲気味に笑う。

なるほど、友羽も友羽なりに不安だったのか。だから、あんなことをした。

「よーしー！」

友羽が叫んだ。両手をぎゅっと握り締め、自分に気合を入れるように。

静かな住宅街、雪の降る道に、友羽の声が響く。

「しーな、当分ここにはこないよ。次来るのは合格してからだ」

さっぱりした様子で友羽が言う。

「来いよ」

「来るよ。私はしーなと違って優秀だからね」

「どうだか。……メリークリスマス」

「メリークリスマス。良い年を迎えるんだよ。しーな」

振り返り、120%の笑顔で友羽はそう言った。

12月24日、クリスマス。街中がきらびやかに彩られる特別な日の出来事。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803p/>

小さなサンタクロース

2011年10月7日00時36分発行